

とり うた ヒトのことばと鳥の歌

ジュウシマツやカナリアなどのある種しゅ とり なわぼ しゅちよう きゆうの鳥は縄張りを主張したり、求
愛あいのときに、まるで歌うた うたを歌うかのようにさえずる。次つぎ つぎから次へと新あたしい「歌うた」
を覚おぼえた結果、100以上けっか いじょうの「歌うた うた」が歌えるまでになる鳥とり とりもいる。鳥はヒトと
同じおなように、音声おんせいという手段しゅだんを使ってコミュニケーションつかをとっているの
で、では、鳥とりにとっての「歌うた」とヒトにとっての「ことばちが」に違いがある
のだろうか。

ヒトの「ことば」と鳥の「歌とり うた」の習得過程しゅうとくかていにおいて、似ている点に てんが三つ挙
げられる。1点目てんめは、まねるという経験けいけんを通して「ことば」や「歌うた」の学がく習しゅう
をするということである。ヒトの子供こどもは聞こえてくる周まわりのことばをまねる
ことしゅうとくで「ことば」を習得としていく。鳥も同様の過程どうようを経て、「歌うた」が歌え
るようになっていく。つまり、成鳥せいちょうの「歌うた」を一度も聞きくことなく育そだった鳥とり
は歌うことはないのだ。2点目てんめは、人間にんげんの子供こどもも幼鳥ようちょうも繰くり返かえし練れん習しゅう
することで、「ことば」や「歌うた」を習得しゅうとくしていく。人間にんげんの乳児にゅうじが、「バブバブ」
などの音声おんせいを繰くり返かえすのは幼鳥ようちょうが最初さいしょに「歌うた」の一部分いちぶぶんを繰くり返かえすのと同
じだ。3点目てんめは、人間にんげんの子供こどもも幼鳥ようちょうも新あたしい「ことば・歌うた」をたやすく学がく習しゅう
できるが、大人おとなや成鳥せいちょうは子供こどもに比べて学がく習しゅうに時間じかんがかかる。人間にんげんの親子おやこが
同時どうじに外国語がいこくごを学まび始めると、子供こどものほうが早はやく上じょう達たつすることはよく知しら

れているが、^{とり}鳥にも^{おな}同じ^いことが言える。

また、^{しゅうとく}習得過程以外にも^に似ている^{てん}点がある。鳥の「^{とり}歌」に^{ほうげん}ヒトの方言にあ
たるようなものがあり、^{おな}同じ^{しゅるい}種類の^{とり}鳥でも、^{せいそく}生息している^{ちいき}地域によって^{うた}歌い
^{かた}方が^{こと}異なる。

しかし、ヒトの「^{とり}ことば」と鳥の「^{うた}歌」とには異なる^{こと}点もある。鳥の「^{とり}歌」
は^{なわば}縄張りの^{しゅちょう}主張や^{きゅうあい}求愛のために^{うた}歌われるのに対し、ヒトの「^{たい}ことば」は
それ以外の^{いがい}さまざまな^{もくてき}目的にも^{つか}使われる。また、鳥の「^{とり}歌」では^{おと}音の^{じゅんばん}順番
を変えても「^{うた}歌」の意味が^{いみ}変わることはないが、ヒトの「^かことば」では、^{たんご}単語
の^{じゅんばん}順番を変えて^か文章の意味が^{ぶんしょう}変わる。

なぜ、異なる^{こと}種であるヒトと鳥が^{しゅ}音声という^{とり}手段を使って^{おんせい}コミュニケーション
をとるようになったのだろうか。鳥は^{しゅだん}木の上では^{つか}葉や枝に^{とり}視界を^き遮
られ、^{うえ}コミュニケーションの^は相手が見え^{えだ}なくなってしまうので、^{しかい}音声を^{さえぎ}進化
させ^{あいて}コミュニケーションをとるようになったと^み考えられている。ヒトにも^{おんせい}進化
させ^{しん}コミュニケーションをとるようになったと^{かんが}考えられている。ヒトにも
^{どうよう}同様な^{てん}点があるのではないかと^{せつ}いう説もある。